

群馬の自然を脅かす外来植物たち

石川 真一（群馬大学社会情報学部・環境科学研究室）

キーワード：オオブタクサ、ハリエンジュ、ショカツサイ、種子特性、生長特性

【外来植物の導入経路】人間活動が原因である。

・意図的導入：利用目的で導入。野菜・園芸・牧草・緑化用等からの逸出。

アクアリウム（ミズヒマワリ）、野菜（カラシナ、コマツナ）、園芸（ショカツサイ、キシノウヅ）、緑化（ハリエンジュ）、牧草（ヒメモロコシ、オニウシノケグサ）

・非意図的導入：利用目的なく結果的に導入。飼料・食料への混入、河川・道路伝いに種子移動。

オオブタクサ、シナダレスズメガヤ、メリケンカルカヤ（茨城県から北上中）

【外来植物の多いところ】

工事したところ：河川敷、橋梁工事地、造成地、道路沿い、ダム周辺、宅地・工業団地開発地
陸水域：利根川、渡良瀬川、中小河川、池、コンクリート用水路、管理の不適切なビオトープ、
放棄水田

【外来植物研究の実例】

1. オオブタクサ (*Ambrosia trifida*: 要注意外来種)

北米原産のキク科一年草。最大草丈 6m にもなる。家畜飼料に混ざって日本に持ち込まれた。各地の工事跡地、特に河川敷改修、橋梁建設、搬送路整備などを行った跡に侵入・定着している。板倉町内の利根川河川敷内の作業道建設地において、数 km にわたる巨大な個体群を形成し、687 万本が生育し、毎年 17 億 3409 万の種子を生産していると推定されている。被圧によって、在来植物種の絶滅および河川敷植生の多様性の衰退を引き起こすと考えられる。花粉症も引き起こす。

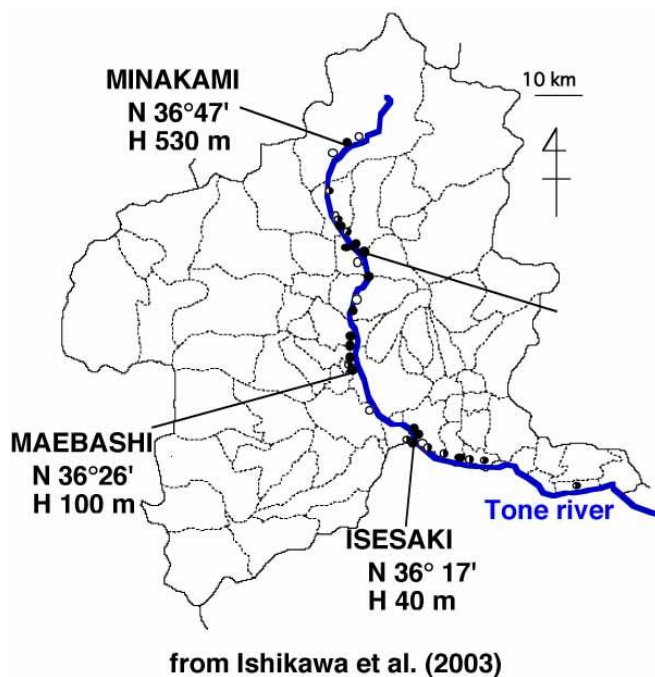


図 群馬県内の利根川河川敷におけるオオブタクサの分布状況。2000年夏の現地調査の結果、59地点中50地点（黒丸と半黒丸）で生育が確認された。

沼田市内利根川河川敷に生育するオオブタクサ
(2003年8月25日撮影)

2. ハリエンジュ (ニセアカシア) (*Lobinia pseudo-acasia*: 要注意外来種)

北米原産の、樹高 25m に達するマメ科の木本植物。街路樹、緑化樹として各地に植栽され、そこからの種子散布によって主に河川敷へ分布が拡大した。足尾山地での緑化植樹が原因で、桐生市内の渡良瀬川河川敷で広大な樹林を形成している。また神流川流域で数 km も広がる樹林を形成している。本種の樹林の下には、非常に少数の草本植物種しか生育しないことから、在来植物種の絶滅および河畔生態系の生物多様性の衰退を引き起こすと考えられる。高密度の樹林を形成して、直接河道を塞いだり、また土砂を捕獲して河道を塞ぐことで、洪水の危険性を高めてしまう。



渡良瀬川河川敷に繁茂するハリエンジュ。伐採しても3年でこのように回復する。
(2008年8月撮影)

3. ショカツサイ (*Orychophragmus violaceus*: 県内危険外来種)

中国原産のアブラナ科越年草。9月頃発芽して秋冬に生長し、2月～5月に開花、6月頃に結実する。これは「春植物」と呼ばれる生活パターンの一つである。種子が親の直下に散布される「重力散布」型であり、発芽率が比較的高いため、しばしば高密度個体群を形成する。路傍などの強光環境下に多く分布して旺盛に生育する。逆に暗い(相対光強度で5%以下)環境下にはほとんど分布せず、試験的に植栽しても生長は非常に悪い。種子は高温でより発芽率が高く、10～15℃で30%前後、25℃以上だと50%～80%程度が発芽する。積雪のない県を中心に、群馬県を含む全国26県以上で定着・栽培中という報告を、インターネットのウェブページを検索すると確認することができる。本種が高密度で生育する場所においては、在来の春植物はほとんど生育しない。



群馬大学荒牧キャンパス内で咲き乱れるショカツサイ。秋冬に生長するので、草刈りから逃れて繁茂する。ハナダイコン、オオアラセイトウ、ムラサキハナナなどの別名で販売され、野外に逸出し繁茂している。
(2003年4月撮影)

【外来植物の防除法】

一度定着すると、なかなか駆除できない。移動・持ち込みの防止が一番。具体的には：

- ・花屋・ホームセンターで買った植物、野菜をむやみに野外に放棄しない。
- ・造園業者は、外来植物の影響について勉強し、むやみに外来植物を販売・植栽しない。
- ・土木建築業者は、工事車両のタイヤに付着した種子を除去する。また残土(業界用語)をむやみに移動・廃棄しないで、工事後に表土として元に戻す。
- ・コンクリート護岸は水質など生育環境を悪化させ外来種の巣窟をつくるので、不用意に行わない。